

# アメリカ人宣教師夫妻の見た幕末の日本

榎本 義子

アメリカ・オランダ改革派宣教師ジェイムズ・ハミルトン・バラ (James Hamilton Ballagh, 1832-1920) は、妻マーガレット・テイト・キニア・バラ (Margaret Tate Kinnear Ballagh, 1840-1909) と共に1861 (文久元) 年に29歳で来日した。1865 (慶応元) 年に彼は自分の日本語教師であった矢野元隆に日本で初めて洗礼を授け、さらに1872 (明治5) 年には、日本最初のプロテスタント教会である日本基督公会 (現在の横浜海岸教会) を設立した。1919 (大正8) 年帰米の途につくまで、彼は伝道活動をはじめ、聖書、賛美歌の翻訳、日本の英語教育などに尽した。21歳で来日したマーガレットも、5人の子供を産み育てるかたわら、夫の日本での活動を助けた。彼女は1909 (明治42) 年69歳で横浜で他界し、山手の外人墓地に眠っている。二人が到着した当時の日本は、攘夷思想の吹き荒れる動乱期であったが、彼らは日本や日本人をどのように見ていたであろうか。資料は主にアメリカ外国伝道局へのバラの手紙、子孫のために書かれた自伝的記録 “Grandpa’s Romance of Mission” (「おじいさんの伝道物語」)、バラ夫人の書簡集 *Glimpses of Old Japan* (Methodist Publishing House, 1908) (『旧日本の瞥見』) を使用した。

人が初めて異国を訪れた時、まず注意を引かれるのは、その国の風景であろう。バラ夫妻は共に日本の自然環境に対して、最初から良い印象を持ったようである。夫妻はアモイ、上海を経由して、神奈川に上陸したが、バラは1861 (文久元) 年12月付のアメリカ外国伝道局に宛てた日本からの最初の手紙の中で、「日本は中国とは対照的に、とても美しい国です。多くの点で我が国と類似しています」<sup>(1)</sup>と日本の第一印象を語っている。また、自伝の中でも、船上から見た「中国の褐色と黒の沿岸」と対照的な「松に包まれた日本の丘」を、

「青草に覆われたカリフォルニアの丘」<sup>(2)</sup>と比べている。

バラ夫人も船上からもみの木に覆われた日本の山々を目にした時の気持ちを、「平坦で、淀んだ上海の後では、なんとという慰めでしょう。……こうした美しい島々に近いことが、私を元気づけます」<sup>(3)</sup>と1861（文久元）年11月3日付の手紙の中で語っている。さらに、神奈川の成仏寺に落ち着いた後、夫人は郊外への乗馬を楽しんだが、穏やかな日本の田園風景は、特に強い印象を彼女に与えたようである。鎌倉に小旅行した時には、夫人は手入れのゆきとどいた生垣に感激し、「日本人は素晴らしい素人の庭師です」<sup>(4)</sup>と手紙の中に記している。また、寺の境内やその周辺に咲く、椿に始まる春の花々も、彼女の心を捕えたようである。

バラは日本の自然の美しさだけではなく、日本の風土が健康的なことにも注目している。彼は日本から外国伝道局へ宛てた最初の手紙の中で、「宣教の仕事の場として、健康という点では、世界にもこの地に勝る所はありません」と語り、任地で健康を害した宣教師達が日本に静養に来ることに触れ、「日本は東洋の大きな療養所になりつつあります」<sup>(5)</sup>と述べている。

夫妻は夏の蚊に悩まされたり、頻繁に起こる地震に驚きながらも、豊かな自然に恵まれた環境の中で、神奈川の成仏寺を住まいとして、日本での伝道活動を始めた。しかし、彼らの周辺では、尊王攘夷の動きが激しくなっていた。1862（文久2）年2（1）月に老中安藤信正が坂下門外で襲撃されたのに続き、6（5）月には東禅寺のイギリス公使館が襲撃され、9（8）月には生麦事件が起こっている。バラ夫人はこうした不穏な動きを、かなり詳しく手紙の中に記している。3月付の手紙では、東海道を乗馬を楽しんだ折、両刃を帯びた武士の一团とすれちがい、彼らから「長く、鋭い、威嚇するような視線」<sup>(6)</sup>を向けられた時の恐怖を語っている。また、生麦事件については、事件の状況やヘボン博士が怪我人の手当にあたったことなどを詳しく述べ、事件以後は、護衛なしには東海道には行かないと書いている。

翌1863（文久3）年には、浪人が外国人を襲撃するという噂が流れ、3月になると、幕府の役人が宣教師達に成仏寺を立ち退くように求めた。寺の警備の

役人達は、国内の大騒動の原因を外国人に帰したが、宣教師達はこうした動きを単に彼らを威す策略だと考えたようである。しかし、バラ夫人は自分達に対する周囲の日本人の態度が変化したことに気づき、成仏寺に宣教師達が住んでいることが、彼らを不安にしており、不穏な事態にいつ襲われるかわからないと感じたが、「何ごとも神の意志に逆らって起こることはできないのだから、私達は落ち着いて仕事を続けるように努力しています」<sup>(7)</sup>と3月4日付の手紙に書いている。

結局、バラ夫妻らは6月の初めに横浜の外国人居留地に移るが、その後も暗殺や砲撃のニュースは後をたたず、夫人はこうした不穏な状況や度重なる引越しで、健康を害している。しかし、1865（慶応元）年2月付の手紙で彼女は、外国人だけが日本の政治的混乱の原因ではなく、外国と条約を締結以前に、すでに日本は革命の機が熟していたことを指摘し、「日本の多数の賢明な進歩派の人々」を信頼して、今は忍耐強く次に起こることを待つべきだと述べている。さらに、彼女は「こうした革命は必ず私達の仕事に有利な状況をもたらすでしょう」<sup>(8)</sup>と、日本での伝道活動に対する希望を捨ててはいない。

こうした日本の政治的混乱や不穏な動きをバラ自身はどのように見ていたであろうか。日本からの最初の手紙の中では、彼は日本では自分達の身にどんなことが起こるかわからないと感じ、「この国において、私達は大きな不安の内に暮らしています。私達の勇気と神の支配される力によってのみ、私達は安全に暮らすことができるのです」<sup>(9)</sup>と日本での生活に不安を抱いているが、1863（文久3）年10月28日付の手紙には、希望の光がさし込んでいる。彼は幕府が攘夷期限を5月10日（和歴）と上奏したこと、同日の長洲藩のアメリカ汽船への発砲や、その後のオランダ艦、フランス艦への砲撃、8月15日（7月2日）の薩英戦争、9月30日（8月18日）の政変などについて詳しく述べ、こうした混乱状態の原因は「外国人追放の偽りに満ちた勅令」であるとし、為政者自身もその誤りに気づいていると記している。そして、「日本の夜の最も暗い時期は終わりました。事態は急激に夜明けの方向に向かっています。私達の仕事の準備がととのう前に、その日がやって来るのではないかと心配です」<sup>(10)</sup>と、日本

での伝道活動に対する希望を強めている。

さらに、1864（元治元）年2月12日付の手紙では、幕府の政治総裁職にあった松平春嶽の家柄や経歴、人柄、彼の進歩的な考えや参勤交替制の緩和などの幕政の改革について述べ、「人道主義者、キリスト教主義の人々は、大越前守、松平春嶽に味方を見い出したと感じはしないでしょうか」<sup>(11)</sup>と語っている。西洋文明、特にアメリカ文明を高く評価した横井小楠を師とし、後に日本研究書を数多く執筆したウィリアム・E・グリフィスを福井藩の藩校に招いた松平春嶽に、はやくからバラが注目していたことは興味深い。

こうしたバラ夫妻の日本の「夜明け」への期待は、彼らの日本人観に根ざしていると言えるのではないだろうか。バラは日本人は「非常に文化の発達した、利口な国民」で、「自分達の習慣よりも勝れたものを喜んで受け入れ、また、勝れたものを見分ける知性を持っている」<sup>(12)</sup>と日本人を高く評価している。バラ夫人も日本人の第一印象を、「人々は決して未開ではなく、親切で礼儀正しく、知的で、進取の気性に富む」<sup>(13)</sup>と述べている。さらに、1865（元治2）年2月付の手紙では、朝廷が京都で外国公使に会見することを決定したというニュースを読んで、日本人の勝れた特質は、「自分の誤りや劣っていることに気づいたら、進んで良い方向に変わろうとすること」<sup>(14)</sup>であると記している。

バラ夫妻は、進歩を求める、知的な国民の心を狭め、その魂を蝕むのは、非合理的な迷信や偶像崇拜、切腹などの野蛮な風習であると考えたようだ。バラは金を盗んだと思いこんで女中に重傷を負わせた「悪い僧」の話や、病気の回復や幸運を「もの言わぬ偶像」に頼る日本の庶民の「痛ましい姿」などを手紙の中に記している。バラ夫人も、眼病と皮膚病に悩む老女が、賽銭箱に金を入れ、「びんずる」を手でなでて、病気の治癒を祈願する姿を見て、「僧侶の策略と欲や、束縛する迷信に縛られた人々の鎖を緩めることができれば、どんなに喜ばしいことでしょう」<sup>(15)</sup>と手紙の中に書いている。

迷信や偶像崇拜に縛られた人々をより良い方向に導ぶくための手段として、バラは二つのものをあげている。一つは医療伝道である。1861（文久元）年12月25日付の手紙で、彼は病気の回復を偶像に頼る少年について述べた後で、多

数の日本人がヘボン博士の治療を受けるために集まってくることを伝え、「医療伝道は当地の人々のために多くのことをなしていることがおわかりでしょう」<sup>(16)</sup>と語っている。さらに、1867（慶応3）年6月25日付の手紙では、彼は宣教医の派遣を外国伝道局に求めている。そして、その理由として、「医者は多大な影響力を持ち、ほとんどすべて病んでいるこうした人々の心と体に大きな利益をもたらすからです」と述べ、自分の牧師でなかったら、「人が一生を捧げて善行を行えるこの分野」へと「直ちに医学の勉強を始めるでしょう」<sup>(17)</sup>と記している。

バラの考える日本人をより良い方向に導ぶくための二つめの手段は教育である。彼は「教育は日本の刷新とキリスト教化の大きな足がかり」<sup>(18)</sup>と考えていた。横浜に到着した直後から、夫妻は日本人の生徒を教え始めたが、バラは日本に女子校と男子校の両方を開設することを望んでいたようである。1865（慶応元）年11月14日付の手紙で、バラは日本人で初めて洗礼を受けた矢野元隆の妻や娘達について述べ、彼女達に、場所と資力があればすぐにでも実行に移したい自分達が計画中の女学校の中核になってほしいという望みをもらしている。彼の日本の女子教育への関心は、後に本国への婦人宣教師派遣の要請へとつながり、1871（明治4）年のメアリー・プライン、L・H・ピアソン、J・N・クロスビーらによる横浜共立学園の前身である「亜米利加婦人教授所」（「アメリカン・ミッション、ホーム」）の開設をもたらしたと言えるであろう。

バラの日本の男子教育に対する関心も深い。1867（慶応3）年1月に軍艦購入のために幕府からアメリカに派遣された使節団の中には、彼の初期の教え子である尺振八や小笠原健蔵らがいたが、バラは彼らをニューヨーク大学やクーパー・インスティテュートなどの教育施設を見学に連れていってくれるよう、外国伝道局の総主事に頼んでいる。さらに、1867（慶応3）年3月付の手紙では、カリフォルニアに留学する二人の教え子に触れ、現在彼のクラスに在籍している英語のよくできる2、3人の青年もアメリカに留学させたいという希望を述べ、友人の教育者にこうした生徒を引き受け、日本で男子の教育施設を開設することに関心を持ってほしいと望んでいる。教育に深い関心を持つバラは、

後に私塾で本格的に英学や聖書を教え、植村正久、本多庸一、押川方義らの勝れたキリスト教指導者をうみ出した。

最後に、子育てなどの生活体験を通して見たバラ夫人の日本の日常生活や、日本女性の印象について考えてみたい。神奈川に上陸した1861（文久元）年11月11日に丁度21歳の誕生日を迎え、翌年6月に長女キャリーを出産した夫人は、女性らしい細やかな目で、日本での日常生活を書簡集の中に記録している。

バラ夫妻の最初の住まいである成仏寺は、ヘボン博士らがガラス窓や紙戸の仕切りを入れて改善したが、薄暗く、陰気だったようである。しかし、夫人はすぐに慣れ、寛ぐことができたと書いている。彼女が最も不便を感じたのは食生活である。野菜、果物、魚は新鮮なものが手に入ったが、肉類には不自由したようである。牛肉は横浜から取り寄せなければならず、豚肉はたまにしか手に入らず、羊は高値で、宣教師は手が出ない、と彼女は手紙に記している。乳製品にも彼女は不自由したようである。ミルクが手に入らないために、乳母を雇う決心をするまで、彼女は長女のキャリーをおも湯とお茶で育てた。

不自由な生活の中で、育児に追われる夫人は、日本女性や日本の親子関係をどのように見ていたであろうか。彼女の日本女性の印象はきわめて良い。彼女は既婚女性のお歯黒や眉を剃る習慣をひどい習慣だと考えたが、若い女性の「美しい白い歯や、輝く黒い目、生き生きとした顔色」は彼女の心を捕えた。また、彼女は女性が「尊重され、理解ある扱い」を受けていることに驚き、喜んでいる。日本では女性がアメリカとほとんど同じくらい自由に出歩くことができること、歴史的にも9人の女帝がいること、日本の神話の主神は女性であることなども、彼女の関心を引いたようである。バラ夫人は日本の文字の形成に女性が果たした役割にも注目し、次のように書いている。

日本では男性が外国語を銜学的に模倣している間に、女性は自分自身の言葉を育て、自国の文学の名声を十分に保ち、夫や兄弟から使うように勧められる新しい中国語の名前や言葉に、断固として抗したのです<sup>(20)</sup>。

しかし、夫人は日本女性の置かれている弱い立場も指摘している。彼女は些細な理由で一方向的に夫から離婚が申し出られることや、一部で行われている

一夫多妻制にも触れ、自由が与えられているために「明かるく、知的で、自信を持った15歳の少女」も、結婚後は、夫と夫の両親、特に「時には鉄の杖で支配する」<sup>(19)</sup> 姑に服従しなければならないことを残念に思っている。女性が結婚後は、お歯黒をし、眉を落して、画一的な生き方を強いられることを惜しむバラ夫人の女性観には、各人の個性を尊重するアメリカ女性の目を感じられる。

バラ夫人の日本の親子関係に対する印象も良い。彼女は「日本は子供の天国である」というイギリス公使の言葉を引用し、日本では子供達がのびのびと自由に振舞い、親もそうすることを勧めていることに着目している。そして、それは「日本人の間で非常に顕著な子供達の側のあの率直さ、愛情、従順さと、親の側のあの優しさと思いやりに大いに関係があると思います」<sup>(21)</sup> と述べている。

バラ夫人は日本女性や親子関係の良さだけでなく、日本の風習の良さも認めている。その一例が5月の節句に鯉のぼりをあげる習慣である。流れに逆らって泳ぎ、流れを溯る鯉は、子供、特に男の子に、鯉のように困難や障害を乗り越えて、成功することを期待する両親が、そうするためには、冷静さや落ち着き、自制心に共に、非常に多くの勇気やエネルギーや忍耐力が必要であることを、子供達に思い出させるためのものだとし、「これは良い考えだと思いませんか、そして、結局、私達はこうした東洋の国々から、何か学ぶことがあると思いませんか」<sup>(22)</sup> と夫人は手紙の中に記している。

文学好きで、繊細な感受性を持つ夫人は、宗教的な偏見にとらわれず、寺の鐘の美しさや、鎌倉の大仏の素晴らしさにも注目している。静けさの中で、寺の夕べの鐘が「優しい、柔らかで豊かな音を響かせると、自然はすべて『聖なる時間です』と言って、礼拝しているように見えます」<sup>(23)</sup> と彼女は語り、彼女自身も鐘の音に共感を覚えることを認めている。また、鎌倉に乗馬旅行をした時には、大仏を見て、「このような人間の創り出した芸術の傑作に対して、私はある程度の畏敬と尊敬の念を抱いたことを認めました」と彼女は手紙に記している。しかし、その後に彼女は「このような像の前で、私達が皆偶像崇拝者でないのは、神の恩寵によるということに気づきました。というのは偶像崇拝

は人間の心の避けられない性向だからです」<sup>(24)</sup>と付け加えている。

バラ夫人は異国での慣れない物質環境に戸惑い、不穏な社会情勢下でノイローゼになったりするが、日本の自然や文化を愛し、日本人の「知的で、進歩的な」面を信じて、文明開化の手助けをしようとする姿勢を貫いている。次に引用する手紙の一節が、彼女の日本に対する姿勢をよく表わしていると言えるであろう。

あなたは、日本が小説の中の遙かかなたの東洋の国ではなく、最も近い東の隣国であり、今やこの国について精通すべき時であるということを知らなければなりません。やがて間もなく、この国の青年達はあなた達の学校に入って来るでしょうし、商人達はすでに絹やお茶を供給しています。また、美術家はあなたの家庭を装飾し、この国の少女達は間もなくあなたの街の通りを歩き、助言を求めて、あなたの側に座ることになるでしょう。しかし、あなたはこの国を謎だと言います。けれど、今や東洋の謎は解け、大日本を隣国として見、同情を持ち、偏見を捨て、彼らがどのように考え、感じるかを知り、彼らが地上の主要な国の人々が占める地位を得、かつ保とうとして熱心に努力するのを助ける、援助の手を差しのべる時なのです<sup>(25)</sup>。

バラの日本人観の根底にも、キリスト教と文明の力に対する強い信頼があるが、彼の日本人に対する信頼感や、日本人を理解しようとする姿勢も見のがすことはできないであろう。彼の来日50年祝会の席上で、明治初期に彼の私塾に学んだ本多庸一は、戦いに破れ「鬱憤に満ちた」佐幕派出身の若い塾生達を、バラは「武士として待遇せられた」<sup>(26)</sup>と述べている。篤い信仰と使命感と共に、こうした日本人に対する信頼感や尊重の念が、攘夷思想の吹き荒れる幕末の動乱期も彼を支え、後に日本の多くの若者に大きな影響を与えることになったのではないであろうか。そして、バラ夫妻の感化を受けた多数の青年達は、日本の近代化に大きな役割を果たしたのである。

(注)

(1) 「ジェイムズ・バラの手紙(1)」(フェリス女学院資料室「あゆみ」第13号, 1984) 17頁。



アメリカ人宣教師夫妻の見た幕の日本

- (2) James Hamilton Ballagh, "Grandpa's Romance of Mission" (指路教会の有地夫妻によりタイプ化されたもの) p. 161.
- (3) Margaret Tate Kinnear Ballagh, *Glimpses of Old Japan 1861-1866* (Yokohama: Methodist Publishing House, 1908) 22.
- (4) *Ibid.*, p. 91.
- (5) 「ジェイムズ・バラの手紙(1)」17頁。
- (6) *Glimpses of Old Japan*, p. 47.
- (7) *Ibid.*, p. 104.
- (8) *Ibid.*, p. 119.
- (9) 「ジェイムズ・バラの手紙(1)」19頁。
- (10) 「ジェイムズ・バラの手紙(4)」(「あゆみ」16号, 1985) 19頁。
- (11) 「ジェイムズ・バラの手紙(6)」(「あゆみ」19号, 1987) 45～46頁。
- (12) 「ジェイムズ・バラの手紙(1)」17頁。
- (13) *Glimpses of Old Japan*, p. 24.
- (14) *Ibid.*, p. 122.
- (15) *Ibid.*, p. 81.
- (16) 「ジェイムズ・バラの手紙(3)」(「あゆみ」15号, 1985) 22頁。
- (17) 「ジェイムズ・バラの手紙(10)」(「あゆみ」23号, 1989) 26頁。
- (18) 「ジェイムズ・バラの手紙(8)」(「あゆみ」21号, 1988) 21頁。
- (19) *Glimpses of Old Japan*, p. 86.
- (20) *Ibid.*, p. 41.
- (21) *Ibid.*, p. 69.
- (22) *Ibid.*, p. 66.
- (23) *Ibid.*, p. 89.
- (24) *Ibid.*, p. 96.
- (25) *Ibid.*, p. 38.
- (26) 佐波亘編『植村正久と其の時代』第一巻(教文館, 昭和12年) 577頁。

(追記)

本稿は日本比較文学会東京支部大会(1989年10月10日, 神奈川近代文学館)において口頭発表した草稿に補筆したものである。